

事業名：3 内水面漁場研究事業

細事業名：(3) アユ資源改善事業

期間：R6 年度～

予算額：3,194 千円（単県 2,094 千円，水産研究・教育機構 1,100 千円）

担当：増殖技術室（田中 秀一）

目的：

2014 年以降、鳥取県の河川では長期的なアユ遡上不良に見舞われた。2023 年度まで実施されていたアユ資源緊急回復試験の結果、河川において早期にアユの産卵が偏ったことによりアユ遡上数が激減した可能性があると判断された。すなわち、海水温が比較的高い時期にアユ仔魚が集中的に流下すると、餌となるプランクトンが不足していた場合にアユの生残が悪くなることが示唆された。このことから、適切な時期に産卵場造成を行い、併せてカワウ防除を実施することでアユ親魚を保護し、産卵を長期化させアユ仔魚の生残率を高めていくことを主眼とした対策を実施しており、その効果検証のためモニタリング調査を実施した。

1 調査内容

(1) 天然アユ遡上数及び孵化日推定調査

千代川、天神川及び日野川の 3 河川（以下、「県内 3 河川」という）における天然アユの遡上状況を把握するため、以下の調査を実施した。

1) 千代川

2024 年 4 月上旬～6 月上旬にかけて、千代川下流域に位置する秋里潮止堰の両岸において延べ 10 回の目視計数調査を行い、遡上数を算出した。目視計数調査は千代川漁業協同組合（以下「千代川漁協」という。）に委託した。

2) 天神川

2024 年 4 月上旬～5 月下旬にかけて、天神川下流域に位置する北条砂丘頭首工（通称 天神森堰堤）の魚道において延べ 10 回の目視計数調査を行い、遡上数を算出した。目視計数調査は天神川漁業協同組合（以下「天神川漁協」という。）所属の組合員に委託した。

3) 日野川

2024 年 4 月上旬～5 月下旬にかけて、日野川下流域に位置する車尾堰堤の中央及び左岸魚道において、延べ 9 回の目視計数調査を行い、遡上数を算出した。また、4 月上旬～5 月下旬にかけて採集したアユ 347 個体について、耳石（扁平石）の日周輪を計数して日齢を算出し、採集日と日齢から孵化日を割り出した。目視計数調査及び採集は日野川水系漁業協同組合（以下「日野川水系漁協」という。）に委託した。

(2) 産卵場調査

1) 千代川

千代川の自然産卵場及び産卵場造成地における産卵状況を把握するため、2024 年 11 月 18 日に千代川（鳥取市菖蒲地先及び叶地先）において、潜水目視による産着卵の確認及び水深・流速の測定、ハンディ GPS を用いた産卵範囲の外周の位置データを取得し、オープンソース GIS である QGIS Desktop3.24.4 により面積を求めた。加えて、産卵場の河床材料の粒度組成把握を行った。

2) 天神川

天神川では、今津堰下流から新田橋の範囲において、2024 年 11 月 12 日に千代川と同様の方法により産卵場調査を実施した。

3) 日野川

日野川水系漁協が 2024 年 10 月 22 日～25 日及び 27 日にかけて車尾堰堤下流（米子市吉岡）で実施した産卵場造成の効果を把握するために、2024 年 11 月 13 日に千代川と同様の方法により産卵場調査を実施した。

(3) 流下仔魚調査

県内3河川におけるアユ仔魚の流下状況を把握するため、以下の調査を実施した。

1) 千代川

2024年10月12日～12月20日にかけて、千代川下流域に位置する県道41号線千代橋（鳥取市古海）において、延べ10回アユ仔魚を採集した。採集時刻は18:00～22:00とした。採集には濾水計（General Oceanics 社製 GO-2030R）を及びフロートを装着した円錐形プランクトンネット（口径45cm、側長95cm、目合0.335mm）を用い、延長約30mのロープを接続して橋上から流心付近の水面に投下し、表層を流下する仔魚を採集した。ネットの設置時間は5分間とした。仔魚の採集は千代川漁協に委託した。得られた試料は速やかに10%ホルマリン溶液で固定した後、研究室において各採集時刻の個体数を計数し、河川流量を用いて、日流下仔魚数及び今期の流下仔魚総数（ともに暫定値）を算出した。

2) 天神川

2024年10月14日～12月16日にかけて、国道320号線天神橋（湯梨浜町田後）において延べ10回アユ仔魚を採集した。採集時刻は18:00～21:00とした。採集及び分析方法は千代川と同様である。仔魚の採集は天神川漁協所属の組合員に委託した。得られた試料は速やかに10%ホルマリン溶液で固定した後、研究室において各採集時刻の個体数を計数し、河川流量を用いて、日流下仔魚数及び今期の流下仔魚総数（ともに暫定値）を算出した。

3) 日野川

車尾堰堤の下流において、2024年10月15日～12月17日にかけて、延べ10回アユ仔魚を採集した。採集時刻は17:00～22:00とした。採集及び分析方法は千代川と同様である。仔魚の採集は日野川水系漁協に委託した。得られた試料は速やかに10%ホルマリン溶液で固定した後、研究室において各採集時刻の個体数を計数した。

(4) 県西部におけるアユ海洋生活期に関する調査

1) 海域プランクトン調査

海洋生活期におけるアユの餌料となる動物プランクトンの動態を把握するため、2024年10月7日～2025年2月3日にかけて、日野川河口周辺の浅海域3地点（St.1: 日野川河口沖、St.2: 佐陀川河口沖及びSt.3: 淀江沖）において、延べ12回動物プランクトン及び表層水を採集し、動物プランクトン密度及びクロロフィルa濃度を測定した。

① 動物プランクトン

各地点で北原式定量プランクトンネット（口径22.5cm、側長80cm、目合100 μ m）を底層から表層まで鉛直曳きして採集した後、実験室に持ち帰り10%ホルマリンで固定した。その後、プランクトン分割器を用いて1/16～1/64に分割し、実態顕微鏡下で「目」あるいは「科」などのレベルで可能な限り同定・計数した。その中で、仔稚魚の餌として重要なカイアシ類ノープリウス幼生及びコペポディト期以降の個体の密度を算出した。なお、密度算出の際の濾水量は、ネット網口面積（0.04 m²）×曳網距離（m）とした。

② クロロフィルa濃度

調査地点毎に表層、中層及び底層の3点から、北原式定量採水器を用いて1リットルの試料水を採水し、実験室に持ち帰った。持ち帰った試料水は47 μ m径のワットマンGF/Fフィルターを用いてろ過し、90%アセトンで一晩抽出した後、吸光光度法により測定した。クロロフィルa濃度は次式により計算した。

$$\text{Chl. a } (\mu\text{g/l}) = 11.64 \times E_{663} - 2.16 \times E_{645} + 0.1 \times E_{630} \times \text{検液量 (ml)} \times 1000 / \text{検水量 (ml)}$$

①及び②の試料の採集は、ともに鳥取県漁業協同組合淀江支所所属の漁業者に委託した。

2) 海域仔稚魚調査

海域における仔稚魚の生息状況を把握するため、2024年10月24日～2025年1月21日にかけて、日野川近傍に位置する佐陀川河口周辺の砂浜海岸砕波帯において、延べ8回仔稚魚を採集した。採集方法は灯火採集とし、日没前後に水中集魚灯（測量用三脚に防水LED灯（4.5W×3個）を接続したもの）を点灯し、罎集したアユ

をタモ網で掬い取った。採集時間は5～30分とし、1～2人の調査員で採集した。アユ仔魚採集尾数と採集時間から、単位努力量当たりの採集尾数（尾/人・10分）（以下「CPUE」という。）を算出した。

2 結果と考察

(1) 遡上数及び孵化日推定調査

1) 千代川

2024年のアユ遡上数は14.1万尾で、近年の遡上数の中では少なくないものの、前年（196.5万尾）に比べると大きく落ち込んだ（図1）。現在、調査地点を千代川最下流にある秋里堰堤の両河岸としているが、当該堰堤は水位の上下によりアユの遡上箇所が大きく変化する。特に圃場で取水が始まると水位が大きく低下し、河川の流れが堤高の低い土砂吐に集中し易くなる。水位低下時には、多くのアユが堤高の低い土砂吐周辺から遡上しているようであるが、堰堤上からの調査は危険なため、近づいての観察が困難であり、目視による調査精度の確保が困難な状況となる。千代川では調査に適した堰堤等が他になく、調査地点の変更が難しいため、今後は水中でタイムラプスカメラを設置する等、精度と安全性を確保できる新しい手法が求められる。アユの遡上は4月上旬から確認されたが、調査で計数できたのは5月中旬以降であった（図2）。

2) 天神川

2024年のアユ遡上数は51.4万尾となり、過去20年で最も遡上数の多かった前年（68.6万尾）には及ばなかったものの、遡上数の多い年であった（図1）。遡上時期は4月中旬～5月下旬で、遡上盛期は5月上旬であった（図2）。

3) 日野川

2024年のアユ遡上数は290.0万尾であり、前年より増加し遡上数がかなり多かったものの、最盛期（2011年：400万尾超）には及ばなかった（図1）。遡上時期は4月上旬～5月下旬、遡上盛期は4月下旬であった。例年と同様の傾向であるが、他の2河川に比べ、日野川の遡上時期はやや早かった（図2）。

日野川における遡上魚の孵化盛期は11月下旬及び12月上旬（両時期を合わせて約60%）であった（図3）。一方、仔魚の流下は10月下旬～11月上旬に多く、特に盛期には20億尾近い非常に多数の仔魚が流下したものの、当該時期の仔魚は生残率が

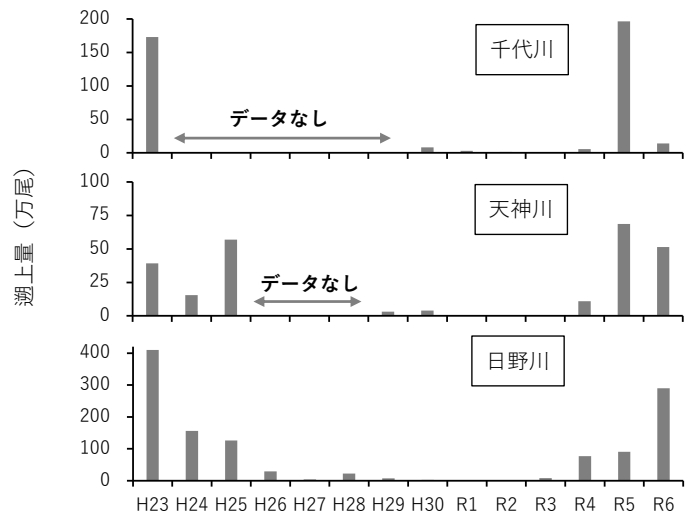


図1 3河川におけるアユ遡上数の年変動

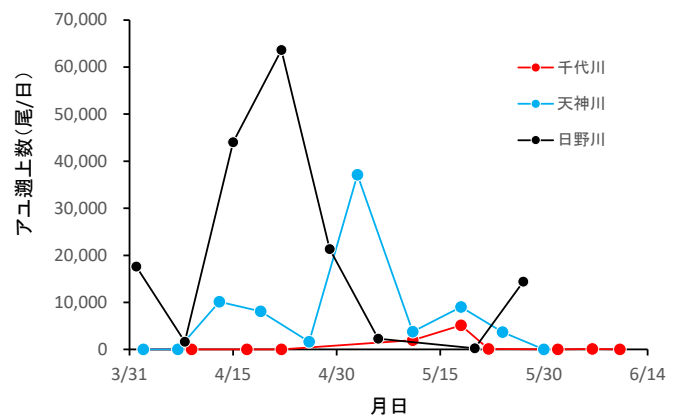


図2 3河川における調査日毎のアユ遡上数

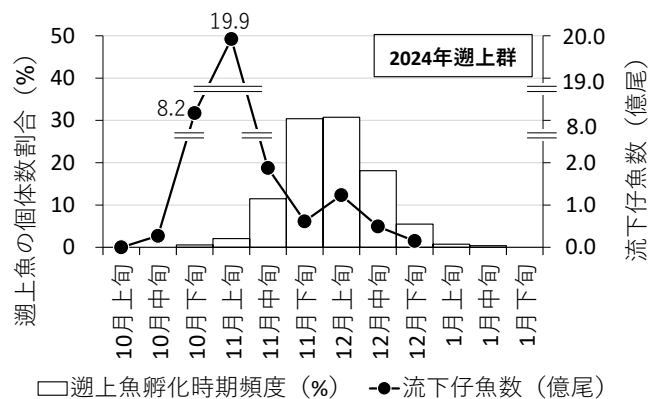


図3 日野川における遡上魚の孵化時期と前年の仔魚流下状況

低かったようである（図 2）。例年であれば、11 月孵化の個体が遡上の主体となるが、2024 年遡上群は 12 月に孵化した個体が半数を占め、傾向が異なった。2023 年は 11 月上中旬の海水温や餌料生物量等がアユ仔魚の生残に不適であったのかもしれない。近年は早期に流下したアユの生残が良くない傾向にあり、アユの遡上数を維持するには、長期間一定数（例えば 1,000 万尾/日程度）の仔魚を流下させることが望ましいと考えられる。これには親魚の保護や産卵環境の維持が必要となる。

（2）産卵場調査

1) 千代川

近年の千代川におけるアユの産卵場は、菖蒲地先及び叶地先で確認されている。2024 年における産卵面積はそれぞれ 2,380 m^2 、2,600 m^2 となり、合計で 4,980 m^2 であった（図 4）。産卵場面積は、過去最大であった 2023

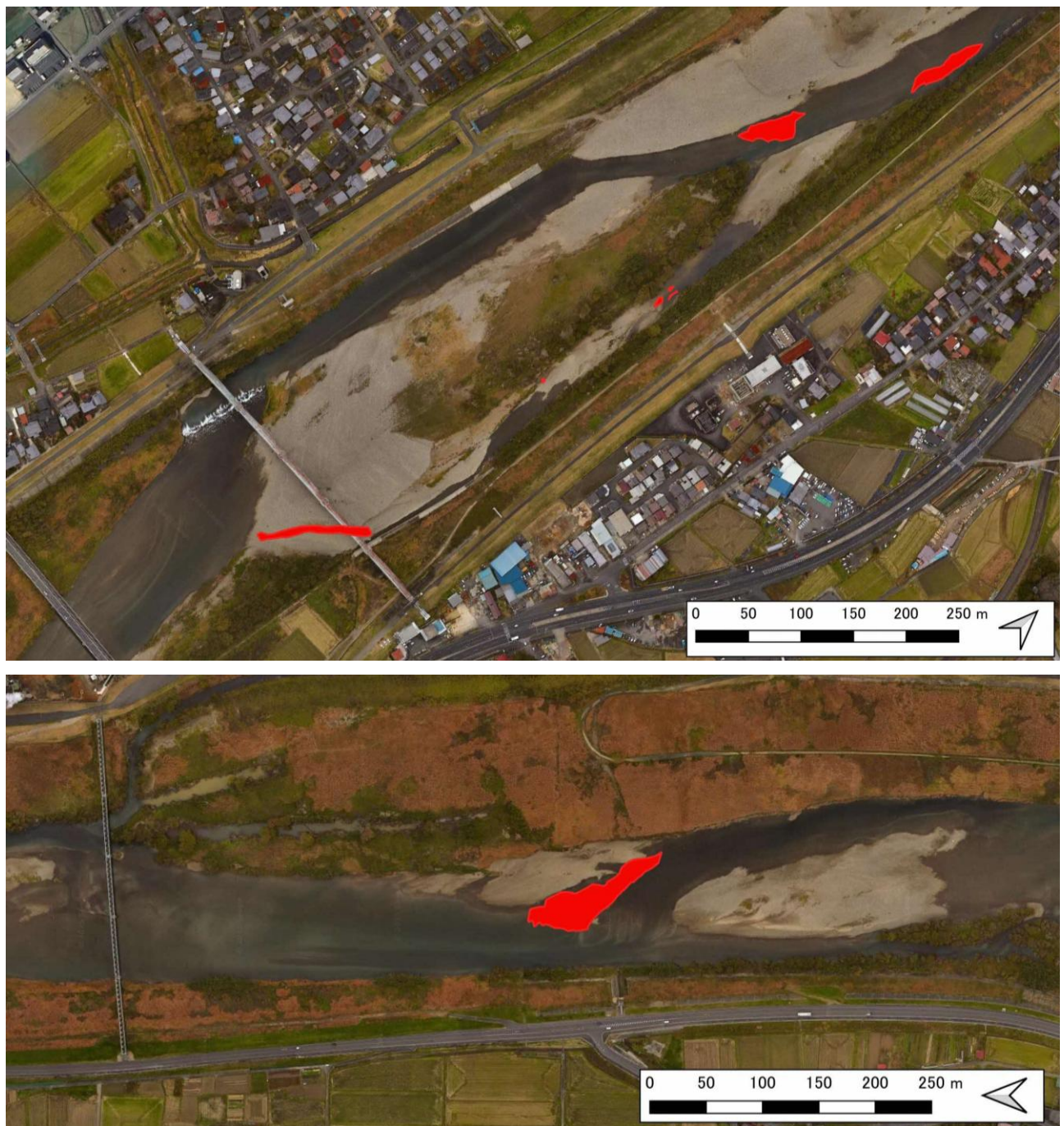


図 4 千代川におけるアユ産卵場（上：叶地先、下：菖蒲地先；産卵場は赤色で示した範囲）

年（4,780 m²）と同等であった。菖蒲地先においては産卵場造成がされておらず、全て天然の産卵場である。また、出水等により瀬の形状が変化するものの、毎年同じ瀬で産卵が行われている。一方、叶地先においては産卵場造成が行われ、この内、1,640 m²で産卵が確認された。天然の産卵場は右岸副流路に形成され、740 m²であった。

親魚については、叶地先の流れの遅い、比較的水深の深い箇所には蟄集していた（図5）。一方、菖蒲地先周辺では親魚の群れを確認できなかった。

叶地先では、カワウ防除のためテグスを設置しており、カワウやダイサギ、コサギ等の群れが設置区間より下流で確認された。叶地先におけるアユの蟄集はテグス設置区間の中間付近で見られたことから、強力な捕食者であるカワウ等が産卵場付近へ進入しづらく、親魚が集合できる環境になっていたと推測される。菖蒲地先ではテグス設置等がされていないことから、カワウ等の捕食によりアユ親魚が逸散している可能性があった。捕食者の存在により産卵場付近でアユが逸散してしまうことは、遡上不良対策として産卵期間の長期化を目指す上で課題となるかもしれない。



図5 叶地先産卵場付近に集合した親魚の群れ

産卵場で測定した水深と流速の範囲を図6に示す。2024年の千代川におけるアユの産卵は、叶地先で水深0.13～0.58m、流速0.28～1.06m/s、菖蒲地先で水深0.28～0.76m、流速0.42～0.74m/sの範囲で行われていた。平均流速については両地点とも0.5～0.6 m/sと同程度で、概ね0.4～0.8m/sの範囲にあった。水深について、菖蒲地先では0.6m/sを超えるような箇所でも産卵が見られた。例年、菖蒲地先でアユの産卵は主に水深0.2m程

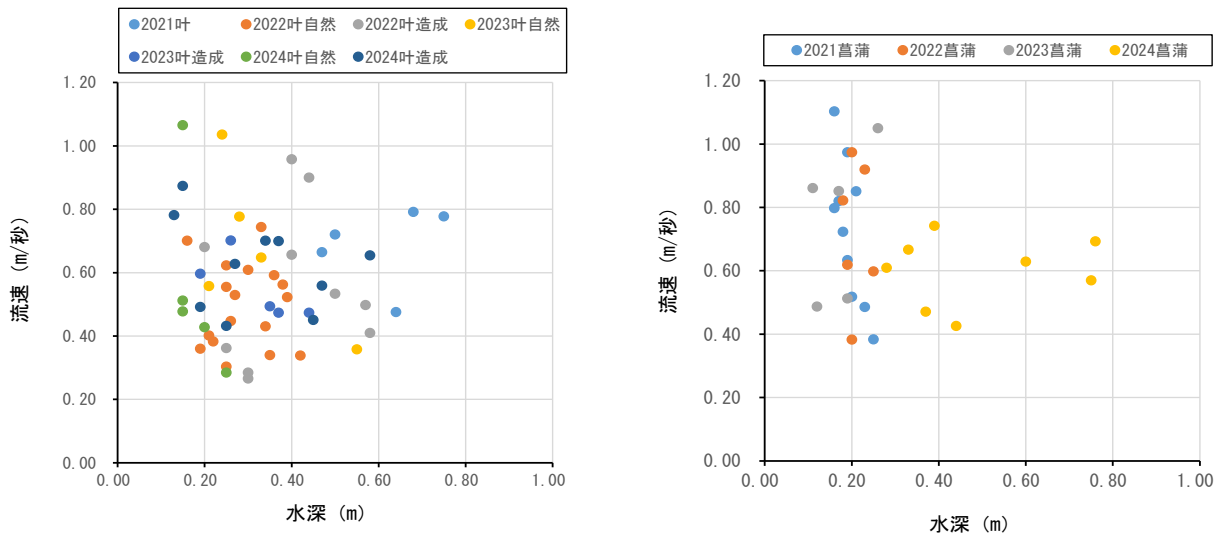


図6 千代川の産卵場における水深と流速（左：叶地先、右：菖蒲地先）

度の箇所で行われていたが、2024年は調査前の11月上旬に出水があり、河床の状況が異なっていたと考えられる。すなわち、これまでは産卵に適した礫が分布している箇所が水深の浅い場所に集中していたが、2024年は出水後にやや水深の深い箇所まで広がったため、例年より水深範囲が広がったものと推測される。

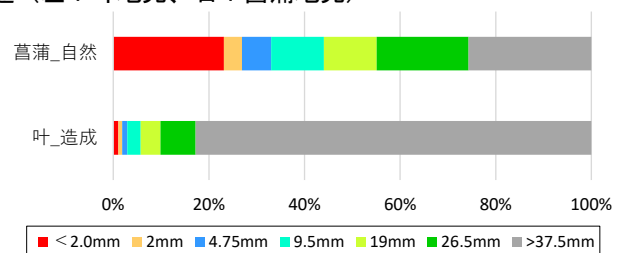


図7 千代川の産卵場における粒度組成

河床の粒度組成を見ると、アユの産卵に好適とされる粒径 5～30mm 程度の礫の割合は、菖蒲自然で 47.4%、叶造成で 15.3%となった。菖蒲自然で 2.0mm 以下の砂がやや多く、叶造成で大型の礫が多かったものの、両地点とも河床は浮石状態となっており、アユの産卵に適した環境であったと考えられた（図 7）。

2) 天神川

今津堰堤から小田橋まで産卵場調査を実施し、小田橋下流で小規模の産卵場約 78 m²を確認した（図 8）。天神川では特に砂が多く、産卵に適した礫石が砂で埋もれている場合が多かった。確認された産卵場では浮石状態になった箇所が狭い範囲ではあるが存在し、そこでアユが産卵していた。

産卵場における水深と流速の範囲を図 9 に示す。天神川におけるアユの産卵は、水深 0.19～0.26 m、流速 0.21～1.02m/s の範囲で行われていた。2022 年と比較すると、流速は大きく変わらなかったが、水深幅は 20cm 程度に集中しており狭かった。

河床の粒度組成を見ると、アユの産卵に好適とされる粒径 5～30mm 程度の礫の割合は、21.5%となった。調査時に観察したところ、小田橋においても河床材料として砂が主体となる箇所が多かったが、産卵箇所については砂分が少なく浮石状に礫が重なっていたことから、比較的にアユが産卵し易かったものと考えられる（図 10）。

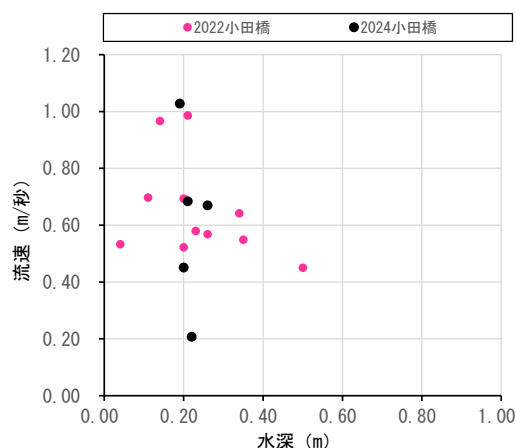


図 9 天神川の産卵場における水深と流速



図 8 天神川におけるアユ産卵場
(産卵場は赤色で示した範囲)

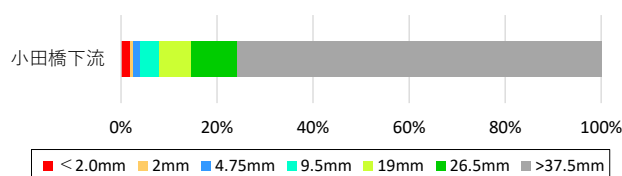


図 10 天神川の産卵場における粒度組成

3) 日野川

車尾堰直下の産卵場造成地で約 1,170 m²産卵を確認した（図 11）。

親魚については、カワウ防除のテグスが設置された産卵場造成地内で確認された。特に最上流の深みや右岸の瀬の直下等に多数のアユが群れていた。日野川においても産卵場造成地はテグス設置がされており、カワウ等の鳥類が進入しづらい状況となっていた（図 12）。



図 11 日野川におけるアユ産卵場（産卵場は赤色で示した範囲）



図 12 車尾産卵場付近に集合した親魚の群れ（左）とテグス設置個所下流に群れるサギ類（右）

産卵場における水深と流速の範囲を図 13 に示す。日野川におけるアユの産卵は、水深 0.10～0.39m、流速 0.27～0.76m/s の範囲で行われていた。

渇水であった前年（2023 年）調査時と比較すると、産卵箇所の水深は深く、2022 年と同程度となった。渇水等の影響がなければ、日野川の産卵場造成地では水深 20～40cm 程度が産卵箇所として好まれるのかもしれない。流速については、概ね 0.40～0.80m/s の範囲にあった。これらは千代川と同様であった。

車尾造成箇所における河床の粒度組成を見ると、アユの産卵に好適とされる粒径 5～30mm 程度の礫は全体の 15.8%とを占めた（図 14）。千代川の叶造成地や天神川の小田に近い値であり、比較的大きな石礫が主体となった。本県の河川においては、砂など粒子の小さい河床材により“はまり石”となっている箇所が多いが、アユが産卵していたのは比較的大型の石礫で構成された“浮石”となった箇所であった。アユは砂によって産卵基質が埋まってしまう箇所を避けているのかもしれない。

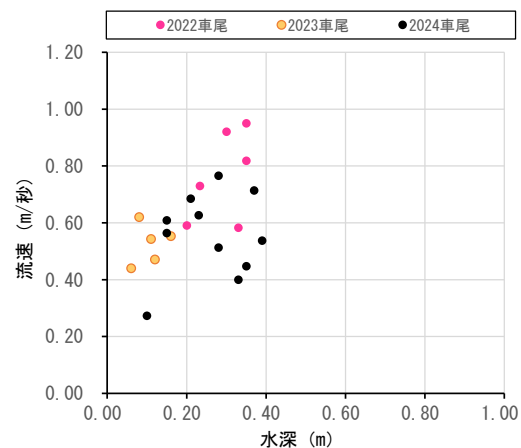


図 13 日野川の産卵場における水深と流速

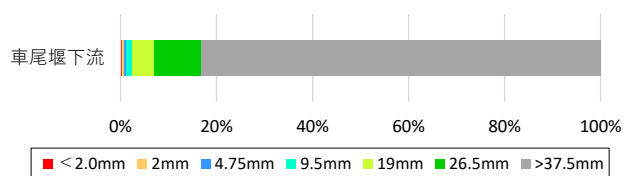


図 14 日野川の産卵場における粒度組成

(3) 流下仔魚調査

1) 千代川

日流下仔魚数は 0（10 月 12 日、12 月 20 日）～2,633 万尾（10 月 21 日）の間で推移した（図 15）。10 月中旬までアユ仔魚の流下を確認できなかったが、10 月下旬には多数の流下が認められた。しかし、鳥取市では 11 月 1 日から 2 日にかけて、連続雨量で 130mm 程度の降雨があり河川が増水したことで、11 月上中旬の流下仔魚数が大きく減少した。しかし、河川水位の低下後の調査でアユの産卵が行われたことを確認でき、11 月下旬にはある程度の流下仔魚が確

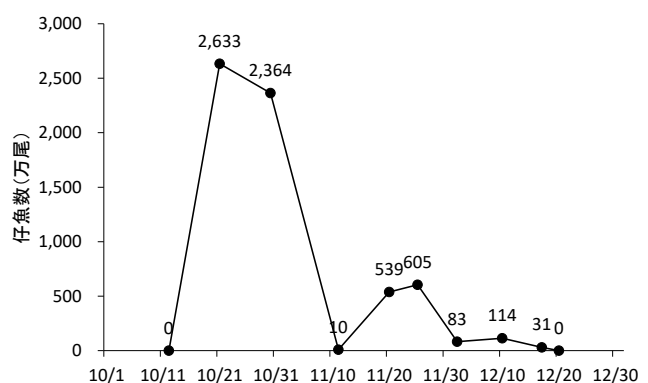


図 15 千代川における日流下仔魚数の推移

認できた（図 15）。

仔魚の流下は 10 月下旬と 11 月下旬に高い水準となり、12 月中旬まで流下仔魚が確認できた。千代川におけるアユの産卵が比較的長く、良い状態で続いたものと判断できる。千代川では菖蒲地先や叶地先で自然産卵場が形成されたほか、千代川漁協が親魚保護（禁漁期や禁漁区等の設定、カワウ対策等）や産卵場造成などの対策を実施した。アユ仔魚が長期間、比較的まとまった数で流下できたことは、それら対策の効果があったものと推測される。

千代川における今期の流下仔魚総数は約 5 億 7,600 万尾（暫定値）であった。一定数の流下仔魚が降下したものと判断されるが、前年比で 3 分の 1 程度まで減少した。千代川では前年よりも産卵場面積が広く、調査時に親魚も多数確認できたことから、産卵状況は良好であったことが窺えた。このため、仔魚数が大きく減少した要因については不明である（図 16）。

2) 天神川

アユ仔魚の流下は 10 月下旬から確認され、ピークは 12 月上旬であった（図 17）。流下仔魚数はかなり少なく、ピーク時で約 6 万尾/日となった。千代川では 10 月下旬に多数の仔魚が確認されたが、天神川では 10 月に仔魚はほとんど見られなかった。千代川で一定数の流下があった 11 月下旬は悪天候により調査できていないが、12 月上旬を比較しても少ない状況だった。

流下仔魚総数は約 87 万尾（暫定値）となり、前年（2023 年）が 1.4 億尾を超えていたことを考慮すると、極めて少なかったと言える（図 18）。また他の 2 河川と比べ、減少の程度が顕著であった。

天神川は砂分が比較的高い割合を占め、産卵に適した大きさの石礫が埋没している箇所が多い河川である。他 2 河川に比べ流下仔魚数が少ない傾向にあるのは、このような生息環境を反映したものと考えられる。一方、2024 年は産卵場も確認できており、少数ではあるが親魚も観察されている（2023 年産卵場調査時はどちらも確認できなかった）。前年に比べ産卵状況は悪くなかったと考えられることから、著しく流下仔魚数が減少した要因については不明である。ただし、いずれの要因にしても産卵適地が少なく、十分な産卵量を確保するためには適切な産卵場対策が必要である。

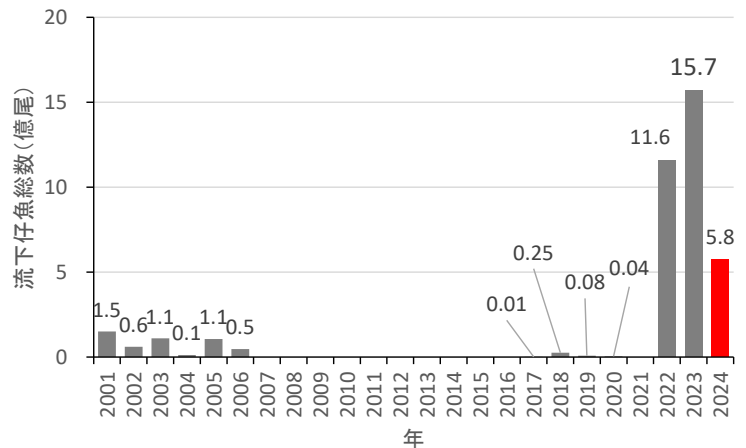


図 16 千代川における各年の流下仔魚総数

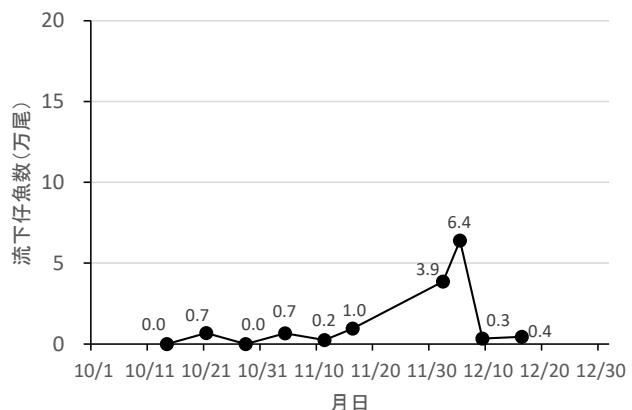


図 17 天神川における日流下仔魚数の推移

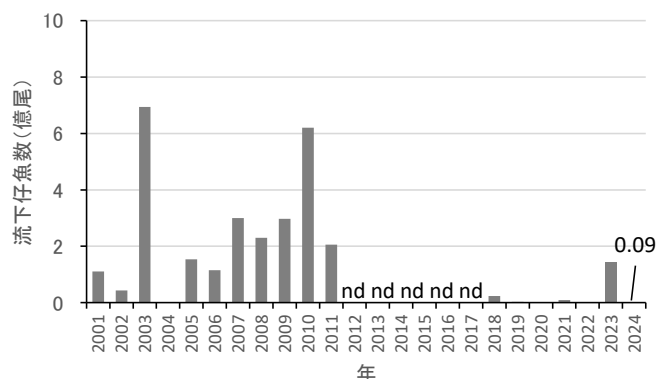


図 18 天神川における各年の流下仔魚総数

3) 日野川

日野川における日流下仔魚数は11月中下旬にピークとなった。流下は10月中旬以降確認されており、12月中旬まで続いた(図19)。他2河川と同様、11月1日、2日に流域で連続雨量170mmを超える降雨があり、増水したことで河床が攪乱された。このため、11月上旬の流下仔魚量は落ち込んだ。しかし、11月中旬に実施した産卵場調査時に多数の親魚が確認されており、調査時の産卵場面積も比較的広がった。河床の攪乱があり一時的に流下仔魚数が減少したものの、多数の親魚が生残し産卵が行われたことで、11月中下旬の流下仔魚増加につながったものと推測される。

日野川における今期の流下仔魚総数は2億2千万尾(暫定値)と推定された(図20)。前年(2003年)の14億2千万尾から比較すると大きく落ち込んだ。日野川では2024年のアユ遡上数が290万尾と相当数であり、産卵場調査時にも多数の親魚が確認できた。また、産卵場面積も前年に比べ2倍程度まで広がっており、良好な産卵状況であった。このため、流下仔魚数は2022年、2023年に続き高い水準となることが期待されたが、他の2河川と同様に大きく減少した。

県内3河川では良好な産卵状況と異なり、流下仔魚数が大きく減少することとなった。流下仔魚数は年変動が大きく、必ずしも産卵の良否を反映するものではないが、産卵後の出水等で河床材が埋まると、孵化したアユが浮上できない場合も起こりうるため注意が必要である。

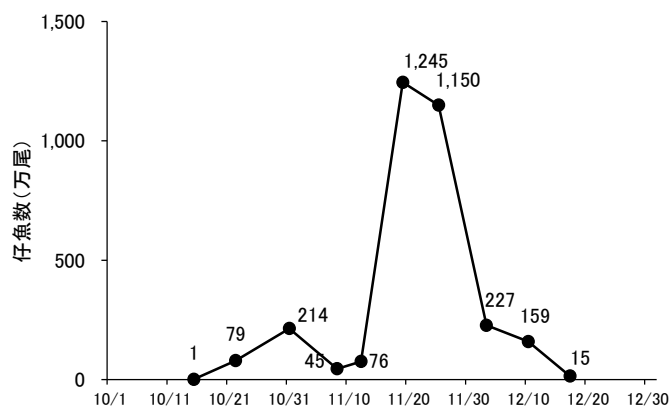


図19 日野川における日流下仔魚数の推移

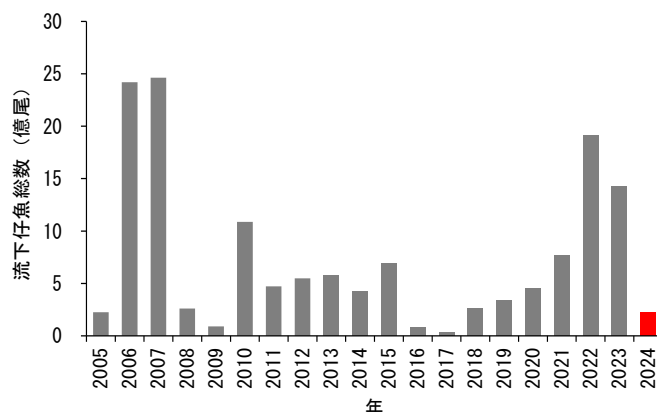


図20 日野川における各年の流下仔魚総数

(6) 県西部におけるアユ海洋生活期に関する調査

1) 海域プランクトン調査

カイアシ類ノープリウス幼生の密度(3地点平均)は2.5個体/Lから31.7個体/Lの範囲で推移した。10月の密度は期間を通して30個体/L程度となり高かった。また11月下旬や12月中旬のそれも20個体/Lを超

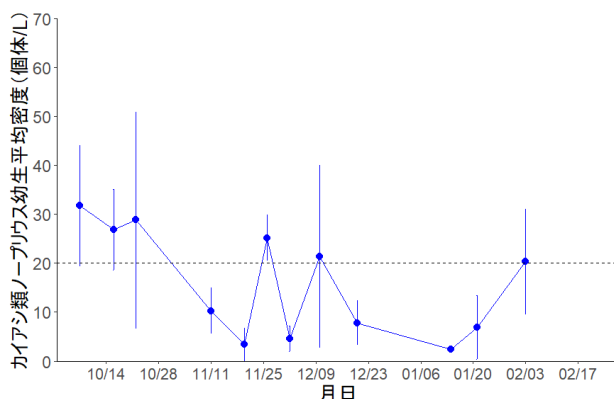


図21 美保湾沿岸におけるカイアシ類ノープリウス幼生密度の推移

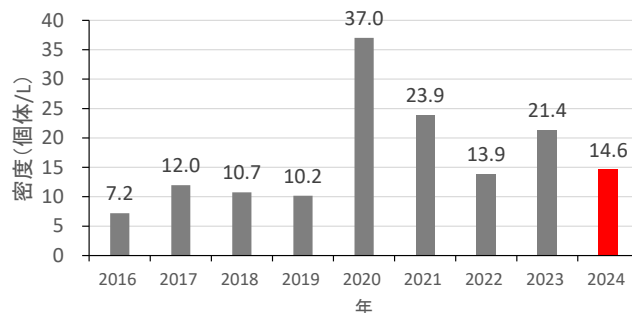


図22 美保湾沿岸におけるノープリウス幼生密度(2016-2024年10月中旬から11月末の平均値)

え比較的高かった。日野川におけるアユ仔魚の流下時期は、11月中下旬がピークとなっており、比較的餌料生物の多い時期に流下できたものと考えられる。また10月中下旬に流下した個体にとっても良好な餌環境となっていた可能性がある。一方、12月下旬から1月中旬にかけてはノープリウス幼生密度が低い傾向にあった（図21）。

アユ仔魚の主な流下期間である10月中旬から11月末におけるノープリウス幼生の平均生息密度は、14.6個体/Lであった（図22）。海域におけるアユ仔稚魚の生残が良かった2021年以降の密度としては低く、比較的初期餌料が少ない環境であったものと判断される。2020年以降、カイアシ類のノープリウス幼生密度は20個体/Lを上回ることが多く、餌料生物が豊富にいることで海域におけるアユ仔稚魚の生残率が高くなった可能性があるが、2024年はやや少ない状況であった。

各調査地点をプールした全層平均クロロフィルa濃度は、ほとんどの期間を1.5 μ g/Lから2.5 μ g/Lの間を推移し、ピークは2月上旬で7.8 μ g/Lとなった（図23）。クロロフィルa濃度はピーク時まで大きな変動がなく、ノープリウス幼生密度の変動との関連は判然としなかった。2月上旬の大幅な増加は春季ブルームを捉えたものだと推測される。

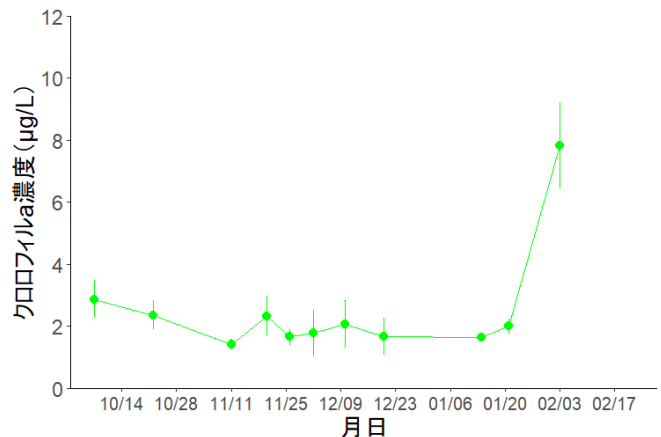


図23 美保湾沿岸におけるクロロフィルa濃度の推移

2) 海域アユ仔稚魚調査

調査期間中、灯火を用いた採集によりアユの仔稚魚を採集した。アユ仔稚魚は11月上旬の調査から採取され、CPUE（尾/人/10分）は0（10月24日）～354.0（11月20日）の範囲にあった。11月20日にCPUEが354.0に達したが、これは灯火によるアユ仔稚魚採集を開始以降、最も高い値であった。また12月2日の調査においてもCPUE 145.0とかなり高くなっており、CPUEには上下があるものの、総体として多数の個体が採集された。2024年度の調査からは、海域におけるアユ仔稚魚の生き残りが非常に良いことが示唆される（図24）。

2018年以降、全ての調査年でアユを採集できた12月におけるCPUEを図25に示す（ただし荒天時における調査を除く）。2024年の調査においては、波の影響を受けず調査できたのは12月2日のみで、CPUEは145.0であった。12月10日及び12月20日の調査時は荒天で波高が高かったため分析から除外した。

2024年の日野川における流下仔魚量は、産卵場面積が比較的広がったも

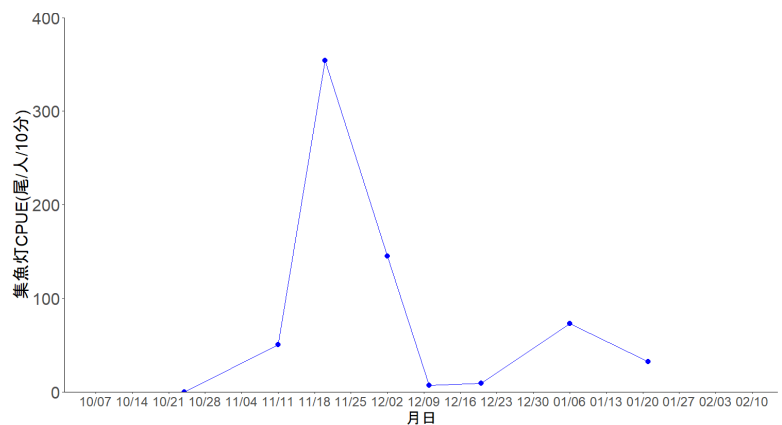


図24 淀江海岸におけるアユ仔稚魚 CPUE の推移

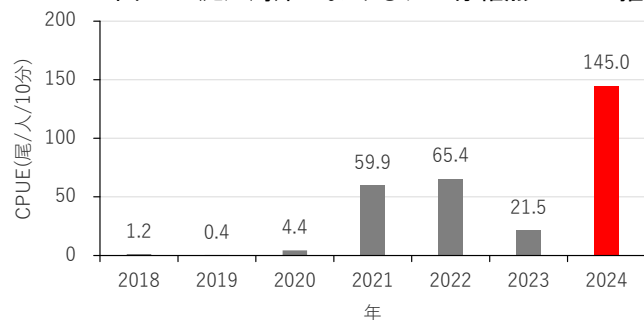


図25 各年12月の淀江海岸におけるアユ仔稚魚 CPUE

の、遡上数の回復した近年のそれと比較して少なかった（図 20）。さらに、沿岸域における初期餌料環境も良好とはいえない状況であった（図 22）ことから、アユ仔稚魚の生残数が減少することが懸念された。しかしながら、淀江海岸におけるアユ仔稚魚 CPUE は過去最高となり（図 23）、流下仔魚数が少ないながらもアユ仔稚魚の生き残りは非常に良かったと判断される。なお、淀江海岸におけるアユ仔稚魚 CPUE と翌年の日野川のアユ遡上数は関連が見られることから、2025 年の遡上数は上向くと期待される。

採集されたアユ仔稚魚の体長分布を図 26 に示す。アユの採集があった 11 月中下旬は全長 20mm 前後の個体が主体となっていた。12 月上旬も全長 20 mm 程度の個体が主体であったものの、25mm を超える個体も一定数採集され、成長が見られた。翌 1 月上旬には、40mm を超える個体も採集され、かなり大型化していたが、1 月下旬にはそのような大型個体が採集されなかった。アユ稚魚は成長に伴い、分布域を拡大することが知られており、より深い場所へ移動した可能性がある。

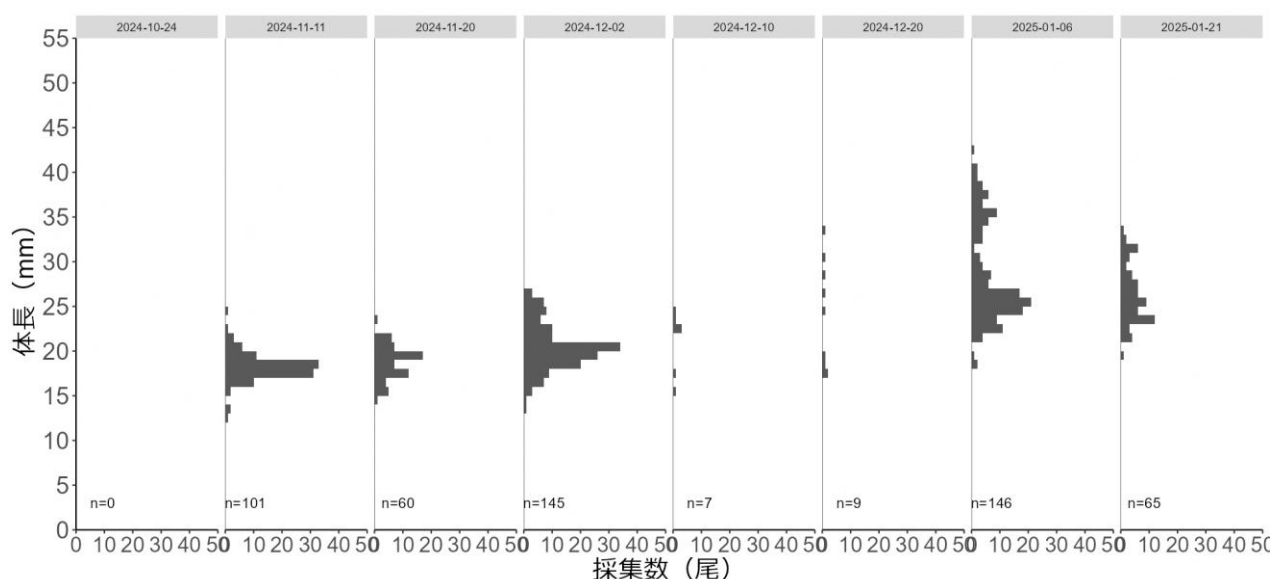


図 26 採集されたアユ仔稚魚の体長分布

成果の活用：全国湖沼河川養殖研究会アユ資源研究部会、水辺の環境保全協議会や各漁協において報告を行った。

関連資料・報告書：令和 6 年度全国湖沼河川養殖研究会アユ資源研究部会報告書